

立松和平著「芭蕉の旅、円空の旅―自利と利他、旅に求めた二つの生き方―」日本放送出版協会 2006年11月20日刊を読む

1. 円空はいつも無名性の中にいる。仏を彫れば彫るほど、その仏がその場所に存在し、他者を救う。つまり、利他をする。彫刻した人間が救われるか、人間として高まっていけるかということ、つまり自利は、問題ではない。仏は仏として普遍性を持ち、いつまでもそこに存在する。利他こそが、円空の存在の仕方だ。円空という作仏聖が確かにいたということはわかっても、どのような生涯を送ったのか、どんな風貌をしていたのか、杳としてわからない。本人が謎をつくったのではなく、最初からわからない存在の仕方をしたのである。円空の生涯を語ろうとする時、明らかに彼が彫った仏像はここにあるのに、円空その人が見えてこないというもどかしさがいつも漂っている。そこまで円空は自己を消し、利他行に生きたということである。
 2. その一方で、芭蕉はその生涯も、その風貌も、ほぼ明らかである。俳諧という文芸は、つねに署名とともに存在する。名を消そうとしても消せない。他者に多くの決定的な影響を与えてきた芭蕉は、利他行をしなかったとはいえないが、思想と行動の中心にあるのは、自己を探求する自利行である。
 3. 円空の作仏は拙巧を超えた聖性があるが、芭蕉の文芸のほうは、明らかに上手と下手とがある。上手の上に築かれる聖性なのだ。
 4. 山形領内に立石寺という山寺がある。慈覚大師の開基で、ことに清閑の地である。一見したほうがよいと人々がすすめるので、尾花沢から引き返したのだが、その間は七里ばかりであった。まだ日も暮れていないので、山麓の宿坊に宿をとっておいて山上の僧堂にのぼった。岩に大岩を重ねて山となし、松 柏も老木で、土にも石にも歳月がついて苔に滑らかにおおわれている。岩の上に建てられた多くの寺院は扉を閉じて、物音も聞こえない。崖のはしをめぐり、岩を這い登り、仏閣を拝せば、まわりの景色は静寂に満たされ、心は澄み渡っていくのを感じた。
- しずかさ
閑 や岩にしみ入る蟬の声
5. 私には『奥の細道』の「立石寺」の段が芭蕉の一つの到達点であると感じられる。静謐の中で万感の思いを込めて吟じたのが、この名句である。
 6. あまりの静かさのために、蟬の鳴く声さえ、岩の中に染み透っていくようである。自分の心もまた、この大自然の中に染み透っていく。
 7. 道元は師の如 浄和尚を木犀の花にたとえている。その教えは木犀のようにかぐわしく、高貴であった。花の姿は見えなくても、教えは香り高くいつもそこにある。木犀の香りと同じように、仏

の教えも即物的なものとしては見ることはできない。

8. その日は天気がよく、初夏の気持ちのよい日であった。午後二時頃に立石寺に着くと、透明で湿気のある夏の空気の中を、蟬の声がまるで僧侶の読経のように響いている。その声は目では見えず、高貴な香りのようなものである。そこに芭蕉と曾良とが、何も引かず何も足さない完璧な風景の一部として、たじろぐこともなく立っている。ただあるがままにしてそこに存在する自然である。自然には、自分がどうなりたいどうしたいという願望はない。願望とは執着である。執着など超越し、ただそこにあるようにしてある。すべてが完璧で、何ひとつ欠けているものはない。円相の中にいる。
9. その完璧な風景の中に、過剰もなく不足もなくまるで円相の中におさまっているかのような蟬は、その姿も声も円満にそこにある真理の中に身をゆだねている。その蟬こそがさとった存在であるといえる。
10. 香りとは、禅でいうさととりである。自然の中でさとった蟬は、その声もそこいらいたるところに遍在し、たとえ岩の中であっても空気中と同じように存在する。真理はいたるところに満ちている。仏の教えは、岩の中にまでしみ入っている。
11. 言葉が万物の実相にまで届いている。私は芭蕉の最高の名句はこの句ではないかと信じている。

P.281 ~ 284

<コメント>

芭蕉の旅、円空の旅をめぐる、立松和平氏の長期にわたる取材に基づいたエッセイ。芭蕉は俳句を、円空は仏像をつくりながら日本国中を旅した。その思いがそこはかとなく伝わってくる立松氏の文章だ。

— 2016年7月10日(日) 林 明夫記 —